

## ヨセフスの生涯 (1)

土 岐 健 治

### (71) ヨセフスの生涯 (1)

「ヨセフス」という歴史家について語るには、まずその名前に関する議論から始めなければならぬ。ユダヤ人である彼のヘブル語名は יְהוֹסֵפִי (Yoseph ben Mattiyah) マッテイヤの息子ヨセフ(1)であったと考えられる。つまり彼の個人名はヨセフであり、これは旧新約聖書・イスラエル史に頻出する名前である。有名なヤコブの十一男(エジプトの宰相)の名前であり、同時代人(?)としてはイエスの父が最も有名であろう(イエスの兄弟にも同名の者がいた。マタイ福音書十三55)。いわば、ありふれた名前であった。ところで、伝えられている彼の著作はすべてギリシア語で記されており、そこ

では歴史家は一貫して自分自身の名前を Ἰωσήφος (Iosephos) ヨセボス(2)と綴っている。さらに面倒なことには、彼は後半生をローマで過ごし、後述するようにローマの氏族名 Iulius (ユラウィウス)を名乗っているのだが、残存する彼の著作のラテン語訳では彼の名前は Iosephus となっており、これは古典ラテン語ではヨセフスと発音する(2)。古くは Iosephus だったらしい。これが Iosephus となったのは、同じ名前がギリシア語訳旧約聖書等において、Ἰωσήφ 及至は Ἰωσήφοσ と綴られていたことによる。しかし四世紀頃からラテン語において ph が f と綴られる現象が認められ、その頃までに ph は f と同じように発音されるようになっていたらしい。これに従えば Iosephus はヨセフスとなる。わが国ではこの

発音が慣用化しており、特に異を唱える理由もないので、われわれもこの慣用に従うことにする。ちなみに英・独語では Josephus、仏語では Joseph 綴る。

ヨセフスの生涯について語る際に、もう一つ断っておかねばならないのは、同時代(ないしは近い時代)の人によるヨセフスに関する証言がほとんど全く存在しないため、彼自身の書き残したものに頼らざるを得ないということである。従って、以下の著作を資料として用いつつ、その生涯をたどることになる。(彼の作品は『ユダヤ戦記』、『戦』、『ユダヤ古代誌』、『古』、『自伝』、『伝』、『アピオン反論』、『反』と略記する)。

二

ヨセフスは、エルサレムにおいて、<sup>(4)</sup>紀元後三七年九月一三日(ないし一四日)から翌三八年三月一六日(ないし一八日)の間に生まれた。これは彼が『伝』<sup>(5)</sup>において、ガイウス(カリグラ)帝が即位した年に自分が生まれたとしていること、及び、『古』<sup>(6)</sup>XX<sup>267</sup>でドミティアヌス帝の一三年が自分の五六年に当っていたと記していることに基いている。<sup>(6)</sup>これはイエスの磔刑に遅れること数

年、ステパノの殉教やパウロの回心とほぼ同じ頃に当る。ヨセフスの少年期はアレクサンドリアのユダヤ人哲学者 フロン(Philon, 紀元前二五/二〇年頃—紀元後五〇年頃<sup>(7)</sup>)の晩年と重なり合っている。ユダヤは紀元後六年にヘロデス大王の息子アルケラオスが統治者の地位(身分は王より一段低い *epitome*)を逐われた後は、四一—四四年の王アグリッパ一世(ヘロデス大王の孫)による支配期間をはさんで、六一—四一年と四四—六六年はローマの皇帝所轄の下級属州として騎士身分の総督<sup>(8)</sup>によって統治されていた。ユダヤ州総督は、独自に処理できない問題に関しては、シリア州総督(Legatus Augusti pro praefore provinciae Syriae)の指示に従った。総督ポンティウス・ピラトウス(在位二六—三六年)の圧政下に民衆の蜂起が相次ぎ、失政の責任を問われて三六年暮にその職を解かれたピラトウスは、約三か月の旅の後ガイウス帝即位直後にローマに到着している。<sup>(10)</sup>ヨセフスが生まれて間もない三八年八月にアレクサンドリアで起こったユダヤ人大迫害は、パレスチナへも飛火し、四一年一月ガイウス暗殺によって、ようやく収まった。ローマとの大戦争(六六—七四年頃)は刻一刻近づいていた。

ヨセフスは『伝』の冒頭において、自分が古く貴い祭司の家に生まれたことを誇っている。彼の家は、二四に分かれた祭司の組 (ἱερωὰτῶν μισμαρ, ἑθνεῖς ἱερωατικῶν) の首位の組に属していた。第二神殿当時、祭司の家系は二四の組に分かれて各組が一週間交代でエルサレム神殿に仕えていた(一つの組には四乃至九の家系が属していた)。たとえばルカ福音書一五によれば、洗礼者ヨハネの父ザカリヤはアビヤ(=第八)の組に属していた。第一の組はヨアリブ (Ἰωαριθῶν=Yoyarithh) と言ひ、紀元前三七年前まで約一五年間にわたって大祭司職を独占したハスモン家もこの組に属していた(第一マカベア書一一)とすればヨセフスの家系はハスモン家に近づくことになるにも拘らず、この点を明記しないのは、当時ラビたちの間にヨアリブの組の地位に関して議論があったことを承知していたヨセフスが、(非ユダヤ人読者たちの無知をよいことに) 自分の家系の所属を「第一の組」とのみ記して、「ヨアリブ」という名前を故意に隠した可能性も高い。ヨセフスはさらに、「しかも(私の一族は)、これも高い。ヨセフスはさらに、」(第一の組)に属する家系(γενεα)の中でも最も優れた家系に属している」(『伝』2)と記している。古く貴

い祭司の家系に属することは、ヨセフスにとって第一の誇りであった。

ヨセフスは又、ハスモン王家との血縁関係をも誇っている。即ち、彼の母はハスモン家に属し(『伝』2)、彼の曾祖父の母は「大祭司ヨナタン」の娘であった(同4)。この「大祭司ヨナタン」とは、「ハスモン家の中で最初に大祭司になった人物であり、大祭司シモンの兄弟」(同箇所)であったヨナタン(在位紀元前一五二—一四三/二年頃)ではなく、アレクサンドロス・ヤンナイオス(在位紀元前一〇三—七六年)を指すものと思われる。右に引用したヨセフス自身のコメントは彼の思い違いによるのかもしれないが、あるいはむしろ、とかく問題が多く非難されがちなヤンナイオスよりも、ハスモン家初代大祭司でもある英雄に結びつけようとしたものとも考えられる。いずれにせよ彼は、二重(三重?)にハスモン家と結びついていたことになる。このことは右に挙げた第一の誇りと並ぶ彼の誇りであり、自慢の種であった。

家系と並んで彼の自負心を形造っていたのは、自らの才能であった。彼の教育は、当時のユダヤ人知識階級の

例にならい、律法（書かれた律法Ⅱ旧約聖書、及び口伝律法）の習得と聖書解釈とが中心であったと思われる。<sup>(19)</sup> 彼のことばによれば「私は……記憶力と洞察力において優れていると評判され、教育に関して長足の進歩を遂げ、まだ幼い十四歳頃には、私は学問好きの故をもって万人によって賞賛され、大祭司たちと町（エルサレム）の指導者たち（of the town）が、私から律法（*torah*）に

関して正確なところを知ろうとして、常に一緒にやっていた来たほどであった」〔伝〕8—9。聖書の読者はここで、イエスの神童ぶりを伝えているルカ福音書246—47を連想するであろう。いずれの場合にも、史実性を云云することはあまり有益とは思われず、むしろ神童ぶりを描く際の常套的な場面の設定と考えるのがよいであろう。<sup>(20)</sup> それにしても、ヨセフスの場合には、既に老境にある人の自分自身に関することばである。このような自信過剰は彼の著作のあちこちに見受けられ、歴史家の若い時代からの特徴であったように思われる。このような彼の人となり、その歴史記述をゆがめているであろうことは充分予想されるところであり、少なくとも、後世の歴史家たちが彼の記述を胡散臭く感ずる大きな理由の一

つが彼のこのような人となりであることは疑い得ない。<sup>(21)</sup> とりわけ、自ら関わりを持った歴史の部分に関しては、それは過度の自己正当化となつて現われる。しかし、それは同時に、あの膨大な歴史を書き進める原動力の一つでもあった。

### 三

ヨセフスは十六歳の頃から、当時のユダヤ教の三大宗派（*pharisees*）であったパリサイ、サドカイ、エッセネの各派を行き巡つてその教えを学び、さらに砂漠の行者パックスにも教えを乞い、禁欲ときよめの生活を送った。（われわれはここで洗礼者ヨハネを連想する）。この期間全体が十九歳頃までの三年間のこととされながら、パックスの許で三年間生活したと記されていることが矛盾として指摘されているが、これはおそらく Shutt, 2 n. 3 の指摘するように、『伝』12の「彼（*of the pharisees*）の許で三年間」を「彼ら（*of the pharisees*）の許で三年間」の誤写と考えることによって説明できるであろう。Hölscher, 1936のように、三派巡りをしたと言うのは、三派について既に自著の中でくり返し書いているヨセフスがその証

言に信憑性を加えるために吹いたほら (Prahlerei) だと言うのは、ヨセフスに対して気の毒である。註19に記した三つの「学校」を終えた後、ラビ乃至は賢者たちの門を叩いていたのが、ヨセフスの十六歳頃—十九歳頃のことであったと考えても不自然では無いであろう。

遍歴時代を終えて、十九歳になったヨセフスは「パリサイ派に従って公的生活を始めた」(『伝』12)。「公的生活」と訳した *Politeubon* のヨセフスにおける用法<sup>(23)</sup>から考えて、ここでヨセフスは、宗教的というよりは政治的な意味においてパリサイ派との関わりを語ったものと解される。実際パリサイ派に関する彼の記述は極めて他人行儀である。彼は宗教的にはむしろ祭司及び預言者として自らを意識していた。<sup>(24)</sup> 政治的野心に燃える青年にとつて、当時最多数のユダヤ人の支持を得ていたパリサイ派と連絡をつけておくことは、不可欠なことであった。<sup>(25)</sup>

#### 四

二十六歳の頃<sup>(27)</sup>に、ヨセフスは、かつてユダヤ総督フェリクス(五二年—五八/九年)<sup>(28)</sup>以下総督の在位年は *Sina-Ilwood* による) によって微罪の故に捕えられてローマ

へ送られていたままになっていた、彼と親しい祭司たちを救うために、ローマへ赴いた。アドリア海で難船し、漂流中を通りがかりの船に救助されて、生命からがらブテオリに上陸している点、数年前の使徒パウロの経験と重なり合う。ヨセフスがローマに着いた頃には、まだパウロはローマで生きていたかも知れない。それはいずれにせよ、彼はネロのお気に入り、「道化役者」<sup>(29)</sup>であったユダヤ人アリテュロスと友情を結び、彼を通してポッパエア・サピナの知遇を得ると、彼女に祭司たちの釈放を働きかけ、おそらく目的を達成した上に(この点後述参照)彼女から多大の贈物まで貰って、帰国した。<sup>(30)</sup> 実は、ユダヤ総督ボルキウス・フェストゥス(五八/九年—六二年)の末期にも、アグリッパ二世の増築した宮殿から神域内をのぞかれるのを防ぐためユダヤ人が目ふさぎの壁を建てたところ、総督がこれを取り壊すよう命じたため、この命令の取り消しを求めて、大祭司を团长とする十名の使節がネロの許へ送られたことがあり、この時にもポッパエアの取りなしによってネロはユダヤ人の願いを容れている(『古』XX189—196)<sup>(31)</sup>。ネロの人気取り政策の現われであろう。この使節団の約二年後にローマへ向か

ったヨセフスは、ネロと帝妃の好意に、目的の達成をかけていたことであろう。ところでその目的とは本当は何だったのであろう。

ヨセフスのローマ旅行を正しく理解するためには、当時のパレスチナの情勢を瞥見することが必要である。四年以来再びローマ総督 (procurator) の支配下に置かれたパレスチナは、最初の二代の総督の間は、テウダスの乱やガリラヤのユダの子らの反乱計画等があったものの、比較的平穏であったが、三代ウエンティディウス・クマヌス (四八―五二年) の時代に重大な暴動・騒乱が相次ぐようになり、次のフェリクスの時代に至って反乱は恒常化した。シカリ派のテロ活動が始まったのもこの頃である。カエサリアのユダヤ人住民と非ユダヤ人住民との争いは、次の総督フェストゥスの時代にもくすぶり続け (ヨセフスはこれが大戦争の発端となったと記している)<sup>(32)</sup>、シカリ派の暗躍、先述の神域の壁を巡る争い、六二年のフェストゥス死後の無政府状態と大祭司アナノスの専横 (彼に処刑された者の中にイエスの兄弟ヤコブもいた)、総督アルビヌス (六二―六四年) の貪欲と無定見は、社会秩序の混乱に一層拍車をかけた。次の総督

ゲッシウス・フロルス (六四―六六年) は、彼と比較すればアルビヌスも、「最善の人」(ὀρθότατος: 『戦』II 277)「恵み深き人」(εὐεργετής: 『古』XX 253)と思われた程の悪代官ぶりで、タキトゥスも「ユダヤ人の忍耐もゲッシウス・フロルスが総督になるまでが限度で、彼の許で戦争が勃発した」(『歴史』五・一〇)と記している。

ヨセフスは六四年頃にこのような物情騒然たるパレスチナを後にしてローマへ向かったのである。幾人かの祭司たちの釈放も目的の一つであったかも知れない。しかし筆者には、彼(即ち使節団?)の真の目的はパレスチナの情勢について、とりわけアルビヌスの暴政について、ネロと帝妃とに訴え、総督の罷免を求めることにあった、と考えるのが最も自然なように思われる。ヨセフスはアルビヌスについて、彼は「悪業の限りを尽し」(「身代金を」払わなかった者のみが悪人として牢獄に残された)と非難し、その結果「かくの如き情勢の中で、エルサレムにおける革新 (reformation) を望む者たちの士気は一層高まり、有力者たちは勝手気儘に暴動を起こすことができるようにアルビヌスを買収し、市民の中でも平穩を好まぬ者たちはアルビヌスの仲間に加わり」、かくして、悪

人どもはしたい放題となり、「来たるべきエルサレム陥落の種はこの時以来播かれ始めたのである」と記している<sup>(33)</sup>。このような時期にローマでポッパエアに会ったヨセフス(乃至使節団)が、祖国の窮状と総督の横暴を訴えなかったと考えることは困難であろう。では何故ヨセフスはそのことを隠そうとしたのか。(彼は『古』と『戦』では自分のローマ旅行そのものについて沈黙している)。それは目的を達成できなかったからである。総督の罷免という表面的な目的は達成されたけれども(六四年に総督が交代している)、その結果既述の通り事態は一層悪化したのである。しかも、新総督はその妻(クレオパトラ。夫に劣らぬ悪女)がポッパエアと親しかった故をもってその地位に任命されたのである(『古』XX252)。つまり、パレスチナの社会秩序を回復し、近づきつつあったユダヤ人とローマとの全面衝突を避けようとしたヨセフスらの願いは、みごとに裏切られたのである。(ネロが属州統治のことなどまじめに取り組んでいなかったことがうかがわれる)。この点をはっきりさせることは、戦争突入・拡大の原因をユダヤ人の「僭主ども」(Typannoi)即ち熱心党・シカリ派及び反ローマ主義者たちに置こう

とするヨセフスの基本的な立場<sup>(34)</sup>に抵触することになるばかりでなく、自己の経歴に傷をつけることにもなる。従って彼はローマ旅行の真相を隠さざるを得なかったのである。——まことにこの歴史家は「あらわすよりも隠す」<sup>(35)</sup>人であった。——このように解する時、ローマ旅行が所期の目的を達成したことを明記せず、曖昧な文章で彼が旅行記事をしめくくっていることも<sup>(36)</sup>、うなずけるのである。

ヨセフスはローマからの帰国の時期も明言していない。ポッパエアが六五年に急死しているから、彼のイタリア出発はそれ以前ということになる。六四年のアルピヌスの召還が彼の請願の結果であるとすれば、(何月頃かは不明であるが)六四年中にイタリアを離れたと考えるのが自然であろう。(六四年七月のローマの大火にふれていないのは、その前に帰途についていたためかも知れない)。ここで『古』XX215の文章が注目される。「アルピヌスは彼の後継者としてゲッシウス・フロルスがやって来ることを耳にすると、……囚人たちを引き出して、その中で明らかに死罪に相当する者たちは処刑するよう命じ、微細でありふれた罪で投獄されていた者たちは、金を取

つた上で釈放した。その結果獄舎からは囚人が一人もいなくなつたが、国土は盜賊(反ローマ主義者)で満ちあふれた。いやがらせとも見えるこの行動は、単に交代を命ぜられた総督の自暴自棄な行動としては余りにも異様である。むしろ自分をローマへ訴え出たユダヤ人に対する復讐と見るべきであらう。(この点を明言できないヨセフスは同箇所で総督のこの行動は「エルサレムの市民たちに何かを提供したと思われようと望んで」のことであるという、わけのわからない理由を記している)。又、この記述と重ね合わせると、ローマから帰国したヨセフスが、今さらのごとく反ローマ的気運の高まりに驚いていること(『伝』17)も理解できるのである。

## 五

ローマ帝国の勢力を改めて印象づけられて帰国したヨセフスにとっては、ローマに刃を向けるなどということのままに狂気の沙汰以外の何物でもなかった。しかし総督フロルスの統治下にパレスチナの情勢は悪化の一途をたどつた。アルビヌスは「こっそりと(偽装して)悪行の数々を重ねたのに対して」、フロルスは「民に対する

不法行為を派手に見せびらかした<sup>(37)</sup>。細かい経緯は略すが、結局穩健派・和平派は過激派・主戦派に破れた。「自暴自棄となつた者たちの狂気が<sup>(38)</sup>圧倒したのである」。しかしヨセフスは「戦いの結末がわれわれ(ユダヤ人)にとって最も不幸なものとなることを予見していた」(『伝』19)。戦争の早期解決をもたらすものとしてヨセフスらの期待したシリア総督ケステイウス・ガッルス率いるローマ軍は、六六年秋に、エルサレムの城壁まで近づきながら、何故か原因不明の退却を開始し、追走したユダヤ人によって殆ど懐滅状態に陥り、主戦派ユダヤ人の意気は一層高まった。多くの反戦論者たちはエルサレムを去り(『戦』II 556)、残った「親ローマ派」の者たちは「強制や説得によつて」(同562)叛乱軍に参加させられた。ヨセフスもその一人であつた。かねてから行動を共にしていた「有力者たち、大祭司たち、パリサイ派の著名な人々」(同411)が相謀つて、この期に及んでもなおあきらめないで、国民の動きを掌握する努力を続け、事態の推移に冷静に対処し、最後の最後まで和平の可能性を探ろうとしたものと思われる。そこには当然反対派との妥協も求められる。聖域で開かれた、おそらく臨時



の集会において、臨戦体制が整えられ、ヨセフスはガリラヤとガマラの「指揮官」(ἡγεμῶν)に任命された(『戦』II 568。同569では彼の地位は στρατάρχηςとされている)。彼の任務は、右に述べた指導者たちの基本的な立場に沿ったものであったと思われるが、なおこの点については、ガリラヤにおける彼の行動の詳細な検討、特にその資料となる『戦』と『伝』の批判的検討の結果と照合する必要がある。既に与えられた紙数は尽きてしまったので、ガリラヤからローマへ至る歴史家の後半生については、続稿に委ねることとした<sup>(41)</sup>。

(1) 『戦』I 3、II 568、『伝』5、7。ヘブル語の形はギリンア語から復原したものである。しばしば父の名が Γηθηθ (Matthyah) とされるが、ヨセフス自身の証言は一貫して Μετρεβας = Γηθηθ である。(Metrebas という一部写本の読みは近代・現代の校訂本では退けられている)。後者は前者の縮小形であり、ヨセフスの時代には短かい形の方が一般化していたらしい。この点詳しくは拙訳『戦』I 36への註参照。ちなみにマッティスヤ = マッティヤは「ヤハウェ(神)の賜物」、ヨセフは「彼(神)は加えたもう」の意。

(2) W. S. Allen, *Vox Latina* (Cambridge: Cambridge University Press, 1965), 26f.

(3) 國原吉之助『中世ラテン語入門』(南江堂、一九七五

年)四五頁参照。

(4) 『戦』I 3、『伝』7。

(5) 三七年三月一六日にティベリウス帝が歿し、同一八日に元老院がガイウス(カリグラ)を新しい元首に任命した。ガイウスの治政を三月一六日から数える者(たとえば J. P. V. D. Balsdon in *OCJ*, 452等)と、三月一八日から数える者(たとえば R. Hanslik in *Kleine Pauly* I, 1016等)とがあるのは、このためである。

(6) テイトゥス帝が八一年九月一三日に死ぬと、同じ日に弟ドミティアヌスが近衛兵たちによって皇帝(Imperator)にまつりあげられ、元老院もこれを追認したのだが、彼の治政を九月一三日から数える者(すぐ後に挙げる Edersheim 等)と、九月一四日から数える者(R. Hanslik in *Kleine Pauly* 2, 122等)とがある。そこでドミティアヌスの一三年は九三年九月一三日ないし一四日に始まることになる。前註の内容と合わせて、ヨセフスの誕生期間を三七年九月一三日―三八年三月一六日とするのが多数説であるが(Edersheim, 441; Schürer I, 74; Holscher, 1934; MB I, 464等)、Schürer (rev.) I, 43は三七年九月一日―三八年三月一八日とする(但し、直前で、ガイウスの一年を三七年三月一八日―三八年三月一七日としている以上、一七日とすべきであろう)。もっとも、國原吉之助教授にお尋ねしたところ、元首の治政は同日から同日までと数える方が、ローマ人の暦の考え方からすれば自然であろう。

とのこと)。いささか穿鑿が細くなりすぎたが、いずれにせよ、ヨセフスの誕生が三七―三八年とされるのは、「ローマ人とユダヤ人の暦法に半年のずれがあったため」(秦剛平訳、ヨセフス『自伝』(山本書店、一九七八年)総説(二頁)ではなし。

(7) S. Sandmel, *Philo of Alexandria* (NY: Oxford University Press, 1979), 3.

(8) 風州は ①元老院所轄風州と ②皇帝所轄風州とに分けられ、それぞれ ④元コーンヌル或いは ⑤元ブラエトルが総督として統治したが、②にのみは ⑥騎士身分の統治する風州があった。マイヤー・三一―四頁、ポールスドン・八六―九六頁参照。ポールスドン・八八頁によれば、アウグストゥス帝死去当時 ①④は二つ(アジア、アフリカ)、①⑤は六つ、②④は七つ、⑤⑥は五つ、⑥⑦は五つ(エジプト、ノリクム、ラエティア・ウィンドリキア、サルディニア・コルシカ、ユダヤ)である。

(9) 六一四年は praefectus, 四四―六六年は procurator. Cf. Schürer (rev.) I, 357-361; Smallwood, 145.

(10) Smallwood, 171f.

(11) 歴代志上二四7―19、『古』VII 365参照。

(12) ヨセフス自身は首位の組がヨアリブであることを明記していない。後述の如くハスモン家との血縁関係を誇つてゐるにも拘らず、ハスモン家も同じ首位の組に属してゐたことについて沈黙してゐる。『古』XII 25で第一マカヌブ書

二1によりつつハスモン家がヨアリブの組に属していたことを記しているが、それが首位の組、即ち自分の家系と同じ組であることに言及していない。あたかも首位の組とヨアリブの組とは別の組であるかの如き書き方である。次註参照。

(13) ヨアリブに関して次のようなラビ文献の記述がある。

「(二四の)組の首位にあったヨアリブがエルサレムに來たとしても、エダヤ(歴代志上二四7ではヨアリブの次に置かれてゐる)は(首位の座から?)追ひ出されるべきではなく、エダヤが上位に、ヨアリブが下位になるべきである」(『バビロニア・タルムッド』「タアニス」二七b。同「アラキン」一三aにも同趣旨のことばがある。引用は Soncino 版英訳による)。「たとえヨアリブが(バビロン)捕囚から帰還したとしても、汝ら(二四組の祭司ら)から一つの組が取り除かれるべきではなく、彼(ヨアリブ)こそが(二四組の中の)一つの組に付属させられるべきである」(『ヤセフタ』「タアニス」一一・二一六。Jeremias, 214による。ヘレミヤスによれば同四・二・六八―一11にも同様のことばがあるとのこと。なお『トセフタ』とは『ミッシュナ』の選にもれた口伝律法(バライタ)の集大成)。おそろくラビたちのハスモン王朝に対する反感が、このような発言を生み出したのであろう。そして R. J. Coggins, *The 1 and 2 Books of the Chronicles* (The Cambridge Bible Commentary, 1976), 123 頁の「ヤリブ」

二四の組分けは、(歴代志上二四7に記されてゐるようにダビデ時代のもではなくて)バビロンからの帰還以後のものである。実際ヨアリブという名前はネヘミヤ記一〇三—九(章節数はヘブル語原典による。日本聖書協会口語訳聖書では一〇2—8)の二二組の祭司表には見当らず、同一二1—7(二二組)、12—21(二二組)の表で始めてそれぞれ一七番目と一六番目として登場し、しかも一二五のヨアリブの直前にのみ唐突に接続詞「(wa=and)」が置かれてゐることは、ヨアリブ乃至はそれ以後の名が後代の付加であることをうかがわせる(Cf. R. J. Coggins, *The Books of Ezra and Nehemiah* (The Cambridge Bible Commentary, 1976), 130)。以下46' Jeremias, 224 言うように、ヨアリブを二四の組の首位に置く歴代志上二四の表はマカベア時代(ハスモン王朝成立以後?)に作られたものである可能性も高<sup>5</sup>。

(14) 秦訳「つまり〔週番祭司の務めを担当する〕氏族のうち最高位にあつたのである」はヨセフスの論点を伝えてゐない。原文は *καὶ τῶν ἐν ταύτῃ (ἢ τῇ πρώτῃ ἐφημερίῃ) δευτέρων ἐκ τῆς ἀρίστης*。

(15) Ὑπερχω δε καὶ τοῦ βασιλικῶ γένους ἀπὸ τῆς μητροῦ. Οἱ γὰρ Ἀκουατοῦ ταιῖς, ὡν ἕγγοτος ἀείλην, τοῦ ἔθνους ἡμῶν ἐπὶ μῆκροτον χρόνον ἡγχεπέτευσαν καὶ ἐβασίλευσαν. 「わたしが又私は母に於いて王族にも属してゐる。とどうのも彼女(母)はハスモン家(直訳:ハスモンの子ら)の末

裔であつたが、ハスモン家は極めて長い期間にわたつてわが民族の大祭司であり、王であつたのである。これを秦氏は「また、わたしは王家の血も享けてゐる。というのは、わたしの先祖には、アサモリーナイオス家の女性と縁組した者がいるが……」と訳し、註で「直訳では、ヨセフスの直接の母が、王家の血統であるかのような印象を与えてしまふ。したがつて、ここでは意訳した」と説明しておられるが、これは「意訳」ではなくてテキストの改竄である。

(16) ヨナタンの即位が前一五二年であつた点については拙訳「第一マカベア書」(教文館版『聖書外典偽典』1所収)概説及び四一〇頁参照。敵に殺された彼の歿年は第一マカベア書が一19—一341の間で日付けを伝えていないため不明。おそらく一四三/二年の冬のことであろう。いづれにせよ一四二年春—一四一年春の間と推定されるシモンの大祭司即位の(少し?)前ということになる。

(17) 『伝』3—5による彼の系図と、ハスモン家の系図(関係のある部分のみ)を並記すると左のようになる。(在位年は紀元前。以下の文の「」内はすべて『伝』3—5からの引用)。

前述のように一四三/二年に死んでゐるヨナタンの娘がヨセフスの曾祖父の母であるというの、年代的に極めて疑問である。他方アレクサンドロス・ヤンナイオスのヘブル名がヨナタンであつたことはその発行した硬貨の刻印



的な不自然さを少しでも緩和するために彼女の治政最後の年(『戦』I 119でサロメの治政は「九年間」とされている)に置いた、という想定も可能。(Schürer (rev.) I, 46 n. 3は「アレクサンドラの九年」を「ヘロデスの九年」(「前二九一—二八八」と解する可能性を示唆している)。なお最後の点に問題が残るとは言え、さし当り右のように考えることによって、承図の含むいくつかの問題点を最もよく説明できるとは思ふ。 Cf. Holscher, 1935; Schürer (rev.) I, 44—46.

(18) 『伝』1—5, 『反』I 54, 『戦』I 3。

(19) 紀元後一世紀のバレスチナのユダヤ人の子供は、五歳頃から *בֵּית סֵפֶת* (*Bêth sepher* ≡ 書物の家) に入つて、文字を、次いで旧約聖書を学び、約五年後(十歳頃)に、今度は *בֵּית תּוֹרָה* (*Bêth talmudh* ≡ 学習の家) で口伝律法を数年間(十二、三歳頃まで)学んだようである。紀元後七〇年前のエルサレムには四八〇の会堂(シナゴグ)があり、その各々に *בֵּית סֵפֶת* と *בֵּית תּוֹרָה* があつたと伝えられてゐる。さらに学業の継続を望む者は *בֵּית מִדְרָשׁ* (*Bêth midrash* ≡ 研究の家) へ進み、さらに学問の道を志す者は特定のラビ(一般に *רֹבֵל* *hakham* ≡ 賢者) と呼ばれることが多い) につれて修業した。 Cf. Safrai, 945—953. ユロンは「ガイウスへの使節」二一〇で、ユダヤ人は「幼年時代から」(Ex τῶν ἡλικίας τῆς παιδείας) 律法 (*νόμος*) の教育を受けたと言ひ、≡ セフスも『反』II 178で「物心のつき始

める頃から」(Ex τῶν ἡλικίας ἀπὸ παιδείας) 律法の教育が始まると記している。さらに『古』XX 264, 『反』I 54 参照。

(20) ≡ セフスとルカの間には依存関係を想定する人々もある。Paret は ≡ セフスがルカを、Hausrath はルカが ≡ セフスをまねたとする (Ederstein, 442 n. 8 による)。M. Krenkel, *Josephus und Lukas* (1894) も、両者の包括的な比較研究を通して、ルカは ≡ セフスを研究して積極的に利用したとするが (Schreckenberg, 126f. による)、「学界の反応は冷たいようである (van Unnik, 56)。一方が他方に依存しているという単純な結論を急ぐことなく、両者の歴史記述全体を詳細に比較検討することは、有益で実り多いものと予想される。(拙訳『戦』I の註においても気付いた点にはあつておいた)。

(21) たとえば Shutt, 125f. 参照。

(22) *ἐπιπέου*. この語を「卒業した」(秦訳)と訳するのは大いに疑問である。

(23) *τοῦ αἰτεῖσθαι* は ≡ セフスにおいては、「生活する」「行動する」「企てる」「成し遂げる」と並んで、「政治的共同体を形成する」「政治的立場をとる」「公人として行動する」「成し遂げる」等の意味で用いられている。『古』III 99 (c), XI 279, XIII 433, XIV 91, XV 263, 264, XX 234, 251, 『伝』258, 262 等参照。特にわれわれの箇所を取り囲んでいる最後の四例は重要である。又、一般に「肉体的生」について用いられる *βίον* が、『伝』257, 258 で *τοῦ αἰτεῖσθαι* と対比的

に私的倫理的な「生活ぶり」について用いられていることも注目される。

(24) J・パウカー『イエスとパリサイ派』(土岐正策・健治訳、教文館、一九七七年)一四九—一八三頁参照。パリサイ派に対する彼の態度がその著作の中で一定していないことについては拙訳『戦』I 112 註 8 参照。

(25) この点については、別の機会に詳論したい。さし当り Lindner 及び van Unnik の書物を参照。祭司及び預言者としてのヨセフスを強調する彼らの論点は基本的に正当であると思われる。さらに Schalit の重要な論考をも参照。ヨセフスをエッセネ派とする Edersheim, 443 の主張は支持者を見出し得ないようである。しかしそのような主張が生まれる程に、ヨセフスの中に隠遁的生活に憧れる気持ち認められることは確かである。(特に、パリサイ、サドカイ両派に比して、異常に長くかつ好意的なエッセネ派に関する紹介が『戦』II 119—163 に見出されることは注目される)。権謀術数(自分自身の、そして周囲の人々の)に飽きたヨセフスが脱俗的な生活に憧れたのも自然なことかもしれない。

(26) Cf. Edersheim, 443.

(27) 『伝』13 ὁ ἡεὶ εἰκοστὸν ἢ καὶ ἑκτὸν ἐνιαυτὸν ἦν「二十六歳の時」の意か「二十七歳の時」の意か、はっきりしない。

(28) 『伝』13 の秦訳では、ヨセフス二十六歳当時(一六四

年頃)の総督がフェリクスであったかのように訳されている。

(29) ἡμολογῶν ἵνα (Factor, reciter of mines, ②composer, writer of mines (LSJ) の意がある。

(30) 『伝』13—16。

(31) この記事の中でヨセフスはこの名うての悪女ゴッパエアを「神を敬う女」(Geosebts)とまで呼んで賞賛していることが注目される。もっともその故をもって彼女をユダヤ教の支持者とみなすのは(R. H. Pfeiffer, *History of NT Times* (NY: Harper & Row, 1949), 194f.) 性急に過るべきであろう。

(32) 『戦』II 284、『古』XX 183—184 参照。

(33) 『戦』II 272—276。『古』XX 208—210 をも参照。

(34) 『戦』I 10—12。「盗賊ども」(Anotai)「悪人ども」(rounpoi) も彼の常套句である。なお『伝』27の終りの部分を秦氏は「……ローマ人との戦争は、わたしたちユダヤ人のイニシアティブでなされたというよりは、むしろ「運命的な」必然に支配されたのだ、ということを読者に知っていただきたいからである。」と訳しておられるが、そうすると戦争の根本原因は運命的必然であったということになる。しかし問題の部分の原文は ὄτι οὐ τροπαίσις ἐπέετο τοῦ τραφίμου τρῶς Piousious Trovatois, ἀλλὰ τὸ τῆλεν θυδύκην、であり、(1)ヨセフスは、ユダヤ人が好んで開戦を決意したのではなく、やむを得ざる情勢に押し出

されたのだ、と言っているのである。ヨセフスは *dukyon* ということばを殆ど専ら「外的強制力」「やむを得ざる事情」「窮地」という意味で用いており、ここでもこの意味で用いていることは明らかである。それにしてもこの文は『戦』 I 10-12とは多少ニュアンスが異なり、ユダヤ人(もつとも「穏健派の」を加えるべきであろうが)に対して弁護的であることは否めない。

(35) A. Schalit, 'Josephus', in *Encyclopaedia Judaica* (1972), Vol. 10, 252, 262.

(36) 『伝』16。この曖昧さは秦氏も指摘しておられる(同氏訳『伝』一四頁)。おそろく τὴν εὐσεβείαν τούτων で祭司の釈放が表現したことを暗示していると思われるが、彼のように自己顕示欲の強い人間があえて成功を明言しない点は注目すべきである。

(37) 『戦』II 277。ヨセフスは、総督たちの悪政(乃至は無能)にも戦争勃発の原因・責任(の少なくとも一部)がある、と言いたそうである。Cf. S. Zeitlin, *JQR* LIX-3, 180.

(38) 秦訳「愚物ども」は原語 *trouphétes* と ニュアンスが異なるように思われる。

(39) Cf. Schalit, 277-9.

(40) ヨセフスのガリラヤでの使命が『戦』では軍事的、『伝』では平和的なものとして描かれているとはしばしば言われるが(たとえば Thackeray, 11; Shurt, 3f. 等)、筆者

には必ずしもそのように思われない。たとえば *trouphétes* は、軍事的な意味で用いられる場合もあるが、ふつう政治的な首長を指して用いられることばである。又『戦』II 568 と対比的に、ヨセフスの平和的使命を記した箇所として引用される『伝』28-29には、次のように記されている。

「(28) 既に述べたようにケステイウスが敗北した後、エルサレムの指導者たち (*oligoi*) は、盗賊どもが革新的な者たちと一緒に武器を豊富に調達しているのを見て、自分たちも武器なしの状態では敵(革新派・盗賊ども)に支配されてしまうのではないかと恐れ——後にその通りになった——、ガリラヤがまだ全体としてローマに背いたわけではなく、その一部はなお平穏であることを知ると、(29) 私と、他に二人立派な祭司 ヨアザルとユダを派遣した。悪人どもに、武器を捨てるよう説得し、民族の最有力者たち (*ostoi*) にそれを保管してもらおう方がよいということを教えるために。彼ら(エルサレムの指導者たち)は、将来に備えて武器を保持しておき、(さし当っては)ローマ側がどのような行動に移るかを静かに見守ろうと考えたのである」。ここでもヨセフスらの使命が武器の調達にあったことが明記されている。(秦訳は、一つながりの文章(「見て」「恐れ」「知ると」の三つの分詞が「派遣した」という定動詞につながっている)を二つに切ることによって、即ち、「ガリラヤ」の前に「さて」を置き、そこから新しい段落を始めることによって、少なくとも文

意を不明瞭にしてゐる)。さらに「セネスは『伝』に於ても、自分がエルサレム人の共同体 (τὸ κοινὸν τῶν ἱεροπολιτῶν = 65, 72, 190, 309, 341, 393。τὸ κοινὸν τῶν ἱεροπολιτῶν) に於いてガリヤ地方の統治権」(ἀποκρίσις = 190。ἡ ἀποκρίσις = 393。τὸ ἑλληνικὸν ἔθνος = 191, 310。ἡ ἀποκρίσις = 194, 341。『戦』の同じ語に「指揮官」(στρατηγός = 194, 341)を委ねられていたことを「セネスは『戦』と『伝』の双方において記してゐるよゝに思われる。以上は通説に対する疑問。両者の相異はさらに慎重に検討を要するものなり」。

(41) 同様に、拙訳『戦』の「セネス書」中の「セネス略伝」参照(日本基督教団出版局版『セネス全集』第一巻(一九八一)所収)。

参考文献表及び略号表

- Baldson, J. P. V. D., *Rome: The Story of an Empire* (World University Library, 1970) (拙訳略号『ローマ帝国』平凡社、一九七二)。  
 Edersheim, A., 'Josephus' in *Dictionary of Christian Biography*, III, (London, 1882), 441-460.  
 Hölscher, G., 'Josephus' in *Panby-Wissowa*, IX (1916), 1934-2000.

Jeremias, J., *Jerusalem zur Zeit Jesu* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1962).

JQR = *Jewish Quarterly Review*.

LSJ = Liddell and Scott's *A Greek-English Lexicon*, revised by H. St. Jones and others.

Lindner, H., *Die Geschichtsauffassung des Flavius*

*Josephus im Bellum Judaicum* (Leiden: Brill, 1972).

Meyer, E., *Römisches Staat und Staatsgedanke*

(Zürich und Stuttgart: Artemis, 1964) (鈴木一雄訳『ローマ人の国家と国家意識』筑波書局、一九七二)。

MB = Michel, O. und O. Baurerfeind, *Flavius Josephus. De Bello Judaico*. Bd. I (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1959).

OCD = *Oxford Classical Dictionary*.

Safrai, S., 'Education and the Study of the Torah' in *The Jewish People in the First Century*, vol. II, edited by S. Safrai and M. Stern (Philadelphia: Fortress, 1976), 945-970.

Schalit, A., 'Die Erhebung Vespasians nach Flavius Josephus, Talmud und Midrash. Zur Geschichte einer messianischen Prophetie' in *Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt*, II-2, edited by H. Temporini (Berlin und NY: Walter de Gruyter, 1975), 208-327.



Schreckenberg, H., *Bibliographie zu Flavius Josephus* (Leiden: Brill, 1968).  
Schürer, E., *Geschichte des Jüdischen Volkes im Zeitalter Jesu Christi*. I-III (Leipzig, 1901-9. reprint Hildesheim: Georg Olms, 1964).  
Schürer (rev.)=—, *The History of the Jewish People in the Age of Jesus Christ*. A new English version revised and edited by G. Vermes and F. Millar, I-II (Edinburgh: T. & T. Clark, 1973, 1979).  
Shutt, R. J. H., *Studies in Josephus* (London:

SPCK, 1961).  
Smallwood, E. M., *The Jews under Roman Rule* (Leiden: Brill, 1976).  
Thackeray, H. St. J., *Josephus, the Man and the Historian* (NY: 1920. reprint NY: Ktav, 1967).  
van Unnik, W. C., *Flavius Josephus als historischer Schriftsteller* (Heiderberg: Lambert Schneider, 1978).  
トキムスルニシテ Budé 版' Loeb 版及び右記 MB 各書用いた。

(一橋大学助教授)